

平成26年9月12日（金）

老球の細道60号

## バスケットボール誕生秘話（IV）

「君は〈大森兵蔵〉を知っているか？」

会津バスケットボール協会理事長 室井 富 仁

2020年の東京オリンピックが遂に現実となって着々と色々なことが進んでいる。このオリンピックを機に日本のスポーツ、日本のバスケットボールに対する国の施策や国民の関心度が大きく変わってくれることを期待している。なにせ1964年第18回東京オリンピックを目の当たりにして育った私達団塊の世代は、オリンピックに対する思い入れは並々ならぬものがある。死ぬ前にもう一度オリンピックをナマで見たいものである

ところで、日本が初めてオリンピックに出場したのは1912年スウェーデンのストックホルムで開催された第5回オリンピックであった。この時の日本選手団はたったの4名。選手は陸上競技に参加する金栗四三、三島弥彦（父は福島事件で有名な三島通庸）、団長は柔道の創始者で有名な嘉納治五郎、そして監督は、バスケットボールを日本に伝えた大森兵蔵である。彼は当時、大日本体育協会（現日本体育協会）の専務理事の要職にあり、このオリンピック参加に最も貢献した人物であった。日本のスポーツ史に残る歴史的イベントに我等が大森兵蔵の名前が残っているということは驚くべきことであり、バスケット関係者としては誇るべきことである。

大森兵蔵は1876年岡山県に生まれ、東京高等商業学校（現一橋大学）を経てアメリカの名門スタンフォード大学に留学した。その後中退して国際YMCAトレーニングスクール（現スプリングフィールド大学）に入学する。そこで当時最新の体育、スポーツを学ぶ。その後、熱烈な恋愛の末結ばれたアメリカ人の妻アニー（日本名：安仁子、19歳年上）を連れて1908年日本に帰国。その時にYMCAで学んだバスケットボールを日本に伝えた。彼は、バスケットボールのみならず、バレーボールも伝え、日本人の体格体位の向上に尽くし、日本の近代スポーツの黎明期に先駆的役割を果たしている。

なぜスタンフォード大学に留学をしていたのに国際YMCAトレーニングスクールに編入したのだろう。その理由は、彼自身が体が弱くて健康に恵まれなかったため、身体の大きいアメリカ人を前にして自分のような虚弱な日本人ではなく体格体位が立派で壮健な国民づくりに寄与しなければならないと思ったからだ。そのために体育学を学ばなければならないと考えた。同じように青雲の志に燃えていた日本人留学生の友人達と常日頃から帰国後の仕事を話し合っている時に体育分野の専門家としての道を歩む決心をしたという。

自分の夢、志を成し遂げ、日本の体育、スポーツ界の中心的人物になった大森兵蔵であったが、その夢のたまものオリンピック出場が死の旅立ちになるとは、すこぶる無念であったに違いない。彼はオリンピックの日本選手団監督としてストックホルムに出発する前から肺結核の病魔にむしばまれていたのである。

京都米原から船に乗り、ロシア・ウラジオストックからシベリア鉄道を経由してスウェーデン・ストックホルムまでは何と17日間の長旅だった。途中何度も咯血をしながら、持ち前の責任感とアニー夫人（病気のために同行）の熱心な看病によってなんとか到着することができた。

到着したにはしたが、開会式に出るのがやっとのことで、監督としての責務は果たせな

かった。オリンピック終了後、現地の医者から絶対安静を言い渡され、しばらく現地に止まった。その後、なぜかアニー夫人の実家アメリカのボストンに渡り、37歳の生涯を閉じたのである。

我等がバスケットボール関係者の中に歴史の表舞台には出れなかったが、自分の健康など気にせず、大いなる志と責任感のために命をかけて使命を果たした人物がいたことを胸に刻んでおきたい。夢、志、使命感、目標などがどんどんスケールダウンする今の時代、大森兵蔵に想いをいたしながら、日々の生活を仕切り直しして、元気に、大きく生きていきたいものである。